

氏名 (生年月日)	^{キク} ^チ ^{レイ} 菊 地 礼 (1993 年 7 月 5 日)
学 位 の 種 類	博士 (文学)
学 位 記 番 号	文博甲第 150 号
学位授与の日付	2022 年 3 月 16 日
学位授与の要件	中央大学学位規則第 4 条第 1 項
学位論文題目	現代日本語における直喩の構文論的研究
論文審査委員	主査 藤原 浩史 副査 林 明子・半沢 幹一

内容の要旨及び審査の結果

1. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

序章

- はじめに
- 先行研究
 - 語彙論的比喩論
 - 構文の類型化
 - 構文・文法形式の収集と分類
 - 比喩の構文の類型化
 - 意味論的比喩論
 - 隠喩への還元
 - 隠喩からの区別
 - 文法に着目した比喩論
 - 先行研究のまとめと問題
- 本論文の方法
 - 本論文における「構文」
 - コーパスによる傾向調査
- 用例収集の概要
- 本論文の構成

第 1 章 直喩と助動詞

1. はじめに
 - 1.1. 本章の目的
 - 1.2. 先行研究とその問題
2. 直喩の形成
 - 2.1. イメージ
 - 2.2. 確かなイメージとしての提示
 - 2.3. イメージの理解
3. みとめ方と直喩
 - 3.1. 助動詞ごとの比喩用法の違い
 - 3.2. 直喩を形成しない「らしい」
 - 3.2.1. 助動詞としての「らしい」
 - 3.2.2. 「らしい」と比喩の不親和性
4. 「ようだ」と直喩
 - 4.1. 助動詞としての「ようだ」
 - 4.2. 外的な根拠によるイメージの確度
5. 「みたいだ」と直喩
 - 5.1. 助動詞としての「みたいだ」
 - 5.2. 内的な証拠によるイメージの確度
6. 「そうだ」と直喩
 - 6.1. 助動詞としての「そうだ」
 - 6.2. 将然相によるイメージの確度
7. 知覚動詞と直喩
 - 7.1. 調査とその結果
 - 7.2. 命題外で機能する知覚動詞と直喩
 - 7.2.1. 「ように+知覚動詞」を用いた直喩
 - 7.2.2. 「と+知覚動詞」を用いた直喩
 - 7.2.3. 真と仮定して事態を提示
 - 7.3. 命題内で機能する知覚動詞と直喩
 - 7.3.1. 「格成分+知覚動詞」の直喩
 - 7.3.2. 直接経験として事態を提示
8. おわりに

第2章 助動詞による直喩のヴァリエーション

1. はじめに
 - 1.1. 本章の目的

- 1.2. 先行研究と問題
- 1.3. 方法
- 2. 「ようだ」型直喩の表現価値
 - 2.1. 「ようだ」直喩の出現分布
 - 2.2. 「ようだ」型直喩の構文
- 3. 「みたいだ」型直喩の表現価値
 - 3.1. 「みたいだ」直喩の出現分布
 - 3.2. 話者判断としての「みたいだ」型直喩
 - 3.3. 心理的距離の形成
- 4. 「そうだ」型直喩の表現価値
 - 4.1. 「そうだ」型直喩の出現分布
 - 4.2. 「そうだ」型直喩の構文
- 5. おわりに

第3章 直喩と副詞

- 1. はじめに
 - 1.1. 本章の目的
 - 1.2. 先行研究と問題
- 2. 対象の定義
 - 2.1. 比況と比喩の区別
 - 2.2. 対象となる副詞
- 3. 比喩における副詞の働き
 - 3.1. 比喩に対する評価の顕在化
 - 3.2. 異質な情報であることの明示
- 4. 「まるで」と直喩
 - 4.1. 「まるで」の意味
 - 4.2. 「まるで」と比喩
 - 4.2.1. 「まるで」型直喩の出現分布
 - 4.2.2. 最適なイメージとしての提示
 - 4.2.3. 「まるで」型直喩の構文
- 5. 「あたかも」と直喩
 - 5.1. 「あたかも」の意味と比喩
 - 5.2. 「あたかも」の導く直喩
 - 5.2.1. 「あたかも」型直喩の出現分布

- 5.2.2. 説明のための直喩
- 5.2.3. 「あたかも」型直喩の構文
- 6. 「さながら」と直喩
- 6.1. 「さながら」の意味と比喩
- 6.2. 「さながら」の導く直喩
- 6.2.1. 「さながら」型直喩の出現分布
- 6.2.2. 実感を表す直喩
- 6.2.3. 「さながら」型直喩の構文
- 7. おわりに

第4章 構文成分としての直喩

- 1. はじめに
- 2. 直喩と副詞・形容詞
- 2.1. 形式
- 2.2. 意味
- 3. 様態・属性と直喩
- 3.1. 複合的な情報の伝達
- 3.2. 複合的情報のメカニズム
- 3.2.1. 連用修飾構造
- 3.2.2. 連体修飾構造
- 3.3. 目の前性の喚起
- 4. 程度表現としての直喩
- 4.1. 程度型直喩とは
- 4.1.1. 意味的側面
- 4.1.2. 構文的側面
- 4.1.3. 分布
- 4.2. 直喩と程度
- 4.3. 共有イメージの利用
- 4.3.1. 名詞を用いた喩辞
- 4.3.2. 動詞（句）を用いた喩辞
- 4.4. 程度の実感的理解
- 5. おわりに

結論

- 1. 直喩のレトリックとしての位置付け

- 1.1. みとめ方とイメージを用いたレトリック
- 1.2. 直喩と目の前性
2. 本論文のまとめ
3. 理論的な寄与
4. 今後の課題

2. 本論文の要旨

序章では、直喩に関わる先行研究を概観する。従来の比喩研究では、文学的な研究に偏り、表現の多様性を対象とするものが多く、文法的な側面を取り扱う研究が少ない。これに対して、直喩を形成する「ようだ」「みたいだ」などの助動詞形式が必要である理由、そして、同じく直喩を導く副詞が必要である理由、さらには、比喩文がもつ構文的な構造を再考する必要性を提唱する。本論文は、直喩表現を「みとめ方」の文法カテゴリーを中心に文法的に解明することを目的とするものであるが、文学作品に偏らず、幅広いテキストを内包するコーパスを資料として、研究を行うことの重要性を主張する。

第1章は、「ようだ」「みたいだ」などの助動詞と直喩の成立との関係を論ずる。直喩の形成には発話者の心理内の表象であるイメージを構文によって言語化し、それが前もってイメージを共有していない受け手に理解される必要があるが、「ようだ」などの助動詞は、イメージに根拠を持った確からしさを付与する。直喩は、物理的には偽の情報であるが、発話者の心理的には真と仮定するものである。そこに根拠が存在することで送り手と受け手で共有した理解を得られると見込んだ表現として直喩は成立する。そのために、特定の推量系の助動詞表現を要すると解釈する。「ようだ」「みたいだ」「そうだ」といった助動詞や「思う」「感じる」のような知覚動詞が直喩の文末部に選択されるしぐみをそれぞれの文法形式が持つ意味から組み上げる。

第2章は、助動詞の選択によって生じたヴァリエーションの表現価値を論ずる。「ようだ」「みたいだ」「そうだ」といったそれぞれの文法形式によって形成される直喩は、異なる表現上の性質・働きを持つものであり、表現の目的や意図に応じて使い分けられることを明らかにしている。

- ・「ようだ」型直喩は、助動詞「ようだ」によって外的情報を根拠とした確からしさがイメージに付与されることで、受け手と送り手で共有が見込まれるイメージの提示を行う。それによって、対象の事物の確かな様相を表す表現として用いられる。
- ・「みたいだ」型直喩は、助動詞「みたいだ」によって内的情報を根拠とした確からしさがイメージに付与されることで、受け手との共有を前提としない送り手にとっての確かなイメージを提示する。受け手との共有を前提としないことから、押しつけがましさがなくなるため、会話文に用いられやすく、もしくは他者との一定の距離感を顕在化させる。
- ・「そうだ」型直喩は、「そうだ」がまだ起きていない事態が発生することの確からしさを表すことによって、実際には起こり得ない事象の発生を錯覚するほどの甚だしさを有していることを表す。程度表現に相当する表現として働いており、様態表現を中心とする直喩においては周

边的となる。

このような助動詞の機能の差違から、直喩表現の形成にあたって、頻度差・使用域・場面の差違が生ずることを記述する。

第3章は、「まるで」「あたかも」「さながら」といった副詞と直喩の関係を論ずる。これらの副詞は、比喩に対する話者の心理的な態度を表し、かつテキスト上では後続する情報がそれまでの情報と異質でありながらも有意味であることへの断りとして働く。話者の態度と読み手の解釈への働きかけを行うことで、直喩の情報としての質をコントロールする要素として位置付ける。そして、「まるで」型直喩、「あたかも」型直喩、「さながら」型直喩といった副詞の選択によって生じる直喩のヴァリエーションについて、出現傾向の違いからその表現上の性質・働きを論じる。

- ・「まるで」は後続する比喩における類似が完全であるとする話者の態度を表示する。完全に類似するイメージであるということは、話者にとって対象を表現するための最適な選択であることを意味する。
- ・「あたかも」は対象の概念的性質や非言語的情報を具体的に言い換える文を導く。直喩に用いられた場合は、対象を具象物のイメージによって言い換える表現を形成する。それは言い換えれば、対象を具体的に説明することであり、「あたかも」型直喩はそのような性質を反映して「哲学」や「芸術・美術」といった非言語的な情報を言語によって説明するテキストへの出現が主になる。
- ・「さながら」は連続性が存在することを示す。直喩に用いられた場合、イメージと発話者の実感に連続性が認められることを表示する。表現対象に対する発話者の実感をイメージによって具象化する表現を形成する。そのため、エッセイのような書き手の経験とその実感を描くことを主とするテキストで主に出現する。

このような副詞の機能の差違から、発話者の比喩に対する態度、そして使用域の差違が生ずることを記述する。

第4章では、構文において修飾を主な働きとする点で共通する副詞や形容詞との比較から、直喩の構文中における働きを論ずる。直喩は「雪のような肌」において肌の様態を雪で表わすように対象のあり様の表現に用いられる場合や「氷のように冷たい」のように「冷たい」という事物の程度を「氷」によって限定して表すように発話者が対象の程度をどのように認定しているかを表す場合がある。特に、様態・属性を表すために用いることが多く、直喩の典型的な用法である。様態・属性の表現としての直喩は、形容詞や副詞のような一般語彙が単一の属性を付加するのに対して、発話者と送り手で共有されるイメージを用いることを利用することで対象の持つ複雑な属性・情報の伝達や目の前に見ているように表現するという「目の前性」の喚起を行う。程度表現として用いた直喩は、対象の状態や属性に関してそのスケール上を限定して表示する。その点で、「とても」のような程度副詞と共通する。しかし、誰もが共有できるイメージを提示することで、相対的であり解釈に個人差がある状態や属性の程度に対して、送り手がどのような程度として認定しているかを受け手が実感的に理解できるようにする。発話者にとっての甚だしさの認定を表示するのみである

程度副詞とは異なる働きを持つことを明らかにした。

結論では、直喩のレトリックとしての位置付けをまとめる。直喩は、イメージをみとめ方の文法形式によって表出する点で「AはBだ」構文によって形成される隠喩や、「AはBでない」構文によって形成される反直喩と共通する。しかし、隠喩は対象への評価（例、「おまえは豚だ」）や指示物の形成（例、「悲哀のお面」）を行うために用いられ、反直喩は他者への応答を行うために用いられる比喩法であり、働きの面で直喩と大きく異なる。直喩のレトリックとしての働きは事物・事柄に焦点を絞った目の前性の喚起であるとまとめる。

3. 本論文の評価

3.1. 研究方法

本論文は、多様なテキストを内包する書き言葉均衡コーパスを主たる資料としており、文学作品偏重であった従来の比喩研究と方法論を異にする。そして、統計的手法を用いて、比喩表現の実態を数値として可視化している点に新しさがある。

しかも、直喩を成立させる比喩指標の文法性を主たる対象としており、比喩というものがいかなる言語現象であるか、それを問い直し、一定の規則性を導きだしたことは、比喩研究の基礎論として有意義なものであると評価できる。なお、比喩指標の用法を比喩表現に限定せず、非比喩的用法（一般的な用法）との差違から、構文的な特徴を帰納的にまとめたことは、比喩の文法的側面の記述的研究として、手堅いものである。

3.2. 論文構成と論理性

第1章において、直喩の構文的な特徴を、物理的に偽の情報を、心理的に真の情報と仮定して提示する構造であることを導きだし、それを実現する文法カテゴリーが「みとめ方（極性）」にあることを特定する。比況の助動詞のうち、「ようだ」「みたいだ」「そうだ」が直喩を構成するのに対し、「らしい」は比喩とは親和しないことから、判断根拠の確からしさが直喩に必須であることを記述する。

第2章では、これにもとづき、「ようだ」「みたいだ」「そうだ」がどのように比喩を形成するか、用例調査にもとづいて解明している。それぞれが構成する直喩表現の差違を明らかにするとともに、「みとめ方（極性）」の文法研究としても価値がある。

第3章では、直喩を導く副詞について同様に、用例調査を行っている。「まるで」「あたかも」「さながら」の調査から、発話者がその直喩をどのような根拠で、また、どのような態度で提示するか、その差違が明らかとなった。

これらは一定の手続きに基づく記述的研究であるが、使用頻度による重みづけがなされており、従来の比喩指標が単なる羅列であったところから進展を見せている。また、使用域（レジストリ）の調査もなされており、たとえば「あたかも」が「哲学」分野の文章に好まれるといったような、非文学的テキストにおける価値も見いだしている。この点では、比喩研究の対象領域を一気に拡大

した成果として評価できる。

第4章では、このようにして形成される直喩表現が、文の中でどのように機能するか、その考察となる。基本的に比喩表現は、事象の様態や属性を表現するものであり、連用修飾・連体修飾を行うものである。本論文における調査でも、それは支持されるものであるが、それを超えて程度を規定する直喩の一群を見いだしている。「氷のように冷たい」「石のように固い」などの表現においては、実感のともなう程度表現としても機能することを発見している。従来は慣用句として、あるいは、様態修飾と区別することなく扱われてきたものであるが、直喩としての異質性、また、「とても」のような副詞表現との異質性を明らかにしている。

ここから、直喩は単なる意味の補充だけではなく、文脈・場に依存した表現価値を有することに論は展開し、直喩が「目の前性（アクチュアリティ）」の喚起を表現価値とする結論にいたる。

直喩の構成要素から、直喩を用いた文章・談話へと論が構成されており、実態調査に基づく記述的研究として、一貫した論文となっている。また、論旨が一つ一つ用例と統計によって実証されており、説得力があるものとなっている。

3.3. 研究の意義と今後の改善点

本論文は、直喩を文の成分に還元して研究するものである。比喩の技法や表現効果を追究する従来の研究とは、対極的な方向性をもつ。しかしながら、比喩という現象を一般的な文法論から観察する方法は独自性がある。そして、徹底した調査主義は、従来なんとなく理解されてきた資料の偏りや、用法の偏り、比喩現象の希少性を可視的に明らかにしている。直喩の記述的研究として、完成度の高いものであると評価できる。

この方法論では、比喩を文法的に解くというよりも、比喩を通した文法研究ではないか、という批判も生ずるところではあるが、主論となる「みとめ方」の研究は、他の文法カテゴリーよりも理論的整備が進んでおらず、むしろ、その領域の研究として価値をもつことになるかもしれない。また、構文論的研究としてみると、比喩表現は文の成分であるため、構文そのものを対象とするものではない。また、研究目的とする比喩表現の「表現価値」は、語彙的な意味でも文法的な機能でもなく、むしろ比喩表現を選択する語用論的なものではないか、という指摘もあった。

確かに、比喩は語彙・文法をともに利用した現象であるから、話し手・聞き手、書き手と読み手の間にある場と、そこでつむがれる文脈に依存した言語現象である。自らの学理に関わる位置づけ、そして、そのテクニカルな説明には洗練が必要であると考えられる。これらは、今後の研究の進展において、改善と発展が期待される場所である。

3.4. 全体評価

以上、本論文は、現代日本語の直喩表現について、とくに、構文論的研究として独自性があり、いくつもの新知見を得ている。比喩表現の基礎研究として、すぐれた研究であると評価できる。また、今後の課題に関しても、最終試験において、明確な指針を示すことができた。

よって、博士（文学）について合格と判断する。